

て解説しているのは直感的で分かり易い。しかし、「筋」は「条」ではないだろうか？カバノキ属やサクラ属のように分類群で樹皮にまとまりのあるものもあるが、一般的には樹皮のタイプと分類システムとはほとんど関係がない。逆にこの点が樹皮観察の面白さでもあるのだろう。

樹皮一つをとっても、唯一種の樹木が加齢とともにさまざまに姿・形を変えていくことは、フィールドでの樹木観察の経験のある方ならお分かりだろう。本書の特徴の一つは、若木、成木、老木と時間を追って樹皮の変化を示しているところにある。評者もダケカンバやミズメなどの樹皮の移り変わりを本書で再確認した次第である。

著者は樹皮だけで樹木を分類できるのかと問いかけ、同時にこれを否定している。あらかじめ植物相が判明している場所ならいざしらず、樹皮だけで樹木を同定するのはやはり困難で、樹形のほかに花や葉そして冬芽などの特徴と組み合わせることで樹木の特徴を掴むことが望ましい。しかし、樹木が年齢とともに樹皮の様子を変えていくのを眺めていることは興味深いものがある。手元に置いておきたい一冊である。(門田裕一)

□小山鐵夫(監)：発見！植物の力 1~10
48+40+40+40+40 pp. A4. 2006. ¥13,650.;
40+40+40+40+40 pp. 2007. ¥14,175. 小峰書店.
ISBN: 4-338-21901-7, 4-338-21902-5, 4-338-21903-3,
4-338-21904-1, 4-338-21905-X; 978-4-338-21906-8,
978-4-338-21907-5, 978-4-338-21908-2,
978-4-338-21909-9, 978-4-338-21910-5.

ややこしい表記になったが、要するに第一期として1~5分冊、第二期として6~10分冊がまとめて函入りになっている。第1分冊の末尾には全分冊をカバーする植物名と用語の索引があり、また本シリーズ全体についての解説と監修者の標榜する資源植物学について述べられている。分冊の書名は1. 人間と植物。2. 穀物。3. 野菜。4. 布と紙。5. ゴムとウルシ。6. 木と木材。7. 花。8. くだもの。9. お茶・砂糖・油。10. スパイス・ハーブ・薬である。1-3, 9-10は小山氏, 4-8は藤川和美氏が担当している。

本書は函の背文字に「小学校中学年以上」と表示されているように、子供の自由研究のヒントを提供しようと意図したものと思われる。はじめの30頁ほどはイラストと美しいカラー写真を軸に、さまざまなトピックを提供しているが、資源利用の歴史的背景だとか、伝播を示す世界地図だとか、自然保護の問題や生態系についてまで、子ども向けということで質を落とすことなく、数多くの話題が提示されているが、説明文はごく短く、スペース的には写真やイラストが主体である。第2分冊以降のどの分冊も、33頁以降に「指導者・保護者の皆さんへ」と題する詳しい解説が5頁あり、参考文献表まで伴う高度なものである。子供の興味を喚起したうえ、大人がこれらの文献に誘導することを意図したものとも推察される。これに加えて「植物の分類について」と題する1頁が必ずついていて、分冊で扱った植物を例として、その分類上の位置づけが示されている。全体として、従来なかった行き方である。

本書は学校図書館での利用を意図したものと思われるが、内容の有意義さを認めても、現在の教師の忙しさからみて、分冊に示されたような話題を授業で扱うことは、むずかしいのではあるまいか。そういう本を取って購入するには、値段の点で問題があるように思う。単冊での購入も可能なようだが、上質紙使用と図書館用堅牢製本のため、40頁ほどの一冊が2,600円前後だから、子供の本としてはためらう値段ではなかろうか。むしろ博物館や植物園なら、来場者の興味喚起のタネとなり、行事のヒントを拾うのに役立つだろう。教育熱心な家庭むきとも言える。5冊をまとめて収容している蓋つきブックケースは、分冊の背文字を見えなくして、無用と思う。大学の植物教室でも、近頃は植物自体を知らない学生がほとんどだから、こういう本を置いておけば、分類学に限らず、彼らの将来の方向の選択に役立つだろう。(金井弘夫)

□平嶋義宏：生物学名辞典 xii+1292 pp.
¥4,500+税. 2007. 東京大学出版会. ISBN:
978-4-13-060215-0.

ユニークな、しかし学名に関する包括的な辞典である。著者は、すでに『学名の話』